

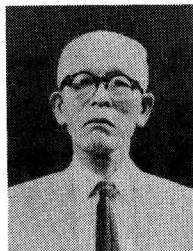
丹 羽 鼎 三 (にわ ていぞう)

明治24年（1891）横浜市に生れる。二高（仙台）を経て、大正六年東京大学農学科を卒業の後、新宿御苑において桜と菊の研究に従事され、大正11年（1922）から

3ヶ年欧米に留学、帰朝後は三重高等農林学校教授、東京大学助教授を、昭和7年全大学教授となられ、昭和27年定年退官した。引続き明治大学教授となって、昭和35年全大学を退職せられた。この間、35年に亘る教職と研究生活を送られた。その後也非常勤講師として若き学生と接触しつつ研究生活を続けられ、後進の指導育成に専念されたのである。

その後、昭和42年（1967）2月23日の夕刻、研究室より帰宅の路上において、不慮の交通事故に遭遇し逝去された。先生は晩年、白内障・網膜剥離等の眼病に悩されつつも、強烈な精神力によって研究に恵心されておられたのであった。

ところで先生の研究業績をみると、これを二期に分けることができる。前期における花卉園芸学では、特に



横 山 光 雄

（東京大学名誉教授）

「日本の菊（学位論文）、と桜」についての研究は、国際的にも著明である。後期における研究は、造園と都市公園緑地に関するものに分けることができる。例えば、「造園樹木の研究」「芝生の研究」「桂離宮の実測的研究」等があげられる。

また先生は、昭和の初期において、日本造園学会の創立に尽力せられ、その会長をつとめられた。さらにまた都市計画学会の発展に対しても協力され、その創立期における常議員のみならず、都市計画協会評議員・公園緑地協会理事等を、あるいは実際の都市計画行政に対する協力として、内務省専門委員・東京緑地計画協議会委員・神奈川県および群馬県都市計画地方委員会委員・旧満州国大東港建設局顧問等の要職を受けている。

以上のように、先生は造園および都市計画における研究を通して、後進の指導育成のみならず、広く都市計画界に対する貢献も大きい。その根源は、先生の高潔な古武士的風格に基づくのではなかろうか。

かつて、新都市に久しく連載されたところの「庭の落葉」は、先生の哲学と美学を、隨筆として表現せられたもので、先生の全体像を探るうえにも、貴重な示唆となるであろう。